

永 添 遺 跡
中津城跡 (御用屋敷跡)
ホヤ池窯跡

1993年度中津地区遺跡群発掘調査概報 (VI)

中津市文化財調査報告 第13集

1993

中津市教育委員会

例 言

- 一、本書は1993年度に中津市教育委員会が実施した中津地区遺跡群発掘調査事業の調査概報である。
- 一、調査は1993年度国宝重要文化財等保存整備事業費及び1993年度大分県文化財保存事業費の補助を受けて実施した。
- 一、調査団の構成は下記のとおりである。

調査主体 中津市教育委員会

調査責任者 高橋 忠隆(中津市教育委員会教育長)

調査指導委員 賀川 光夫(別府大学教授)

小田富士雄(福岡大学教授)

後藤 宗俊(別府大学教授)

甲斐 忠彦(大分県立宇佐風土記の丘歴史民俗資料館学芸課長)

真野 和夫(大分県立宇佐風土記の丘歴史民俗資料館調査課長)

調査員 清水 宗昭(大分県教育庁管理部文化課埋蔵文化財第一係長)

栗焼 憲児(中津市教育委員会市民文化センター文化財係主任)

調査事務 土井 勝(中津市教育委員会市民文化センター館長)

佐藤 輝正(" 会館係長)

田中布由彦(" 文化財係主任)

上記のほか下記の方々現地にて有益な御助言、御指導を賜った。

松村恵司(文化庁文化財調査官)渋谷志章、村上久和、小林昭彦(大分県教育委員会文化課)高橋徹(大分市歴史資料館)。

- 一、本書の執筆、編集は栗焼が行った。また、遺物整理については中野温子、岩崎弘子、秋吉美和子、金丸孝子、高崎章子(中津市歴史民俗資料館)の協力を得た。

目 次

第1章 地理と歴史的環境	2
第2章 永派遺跡	3
第3章 中津城跡(御用屋敷跡)	9
第4章 ホヤ池遺跡	11



1. 中津城跡
2. 薄根遺跡
3. 粟田小学校遺跡
4. 高畑遺跡
5. 鈴屋古墳
6. 養生古墳
7. 天神寺古墳
8. 高瀬遺跡
9. 上方田遺跡
10. 三口遺跡
11. 相原麻寺
12. 坂手新橋穴
13. 相原古墳
14. 柳原古墳
15. 上の原橋穴
16. 佐知遺跡
17. 中原遺跡
18. 西神社
19. 穂原池原跡
20. 藤水古寺
21. 牛嶋天王遺跡
22. 中央野原跡
23. 友枝瓦窯跡
24. 穴ヶ塚山古墳
25. 金原塚古墳
26. 永添遺跡

図1 中津地方主要遺跡分布図

第1章 地理と歴史的環境

大分県の北部、周防灘に面する中津市は、人口67,000人余り、市域55.67km²を有する県北の中核都市である。本地域の地形は、沖積平野である沖代平野と、洪積台地である通称下毛原台地によって代表される。遺跡の多くは下毛原台地と、山国川沿に発達する河岸段丘上に立地し、沖積平野には広大な条里遺構が展開する。旧石器時代の遺跡は近年断片的ではあるが散見されつつある。その立地は洪積台地の先端部に多く認められ、後期旧石器時代に属する。

縄文時代の遺跡の多くもこうした洪積台地に立地する。これは縄文時代の海進状況を示していると考えられ、唯一、高畑遺跡のみが海岸部に近い河岸段丘上に立地する。

弥生時代と古墳時代の遺跡はほぼ分布域を同じくして立地する。多くは洪積台地には分布し、一部山国川の河岸段丘上や、八面山(標高659m)から延びる高位の丘陵上に分布する。

七世紀以降、沖代平野には条里制がしかれ、現在に至るまで本地域の経済基盤の基幹をなす。

第2章 永添遺跡

1. 調査に至る経緯

1992年度、中津市では老朽化に伴う市営火葬場の全面改修の計画が持ち上がった。これに伴い、担当課である保健衛生課と、中津市教育委員会は埋蔵文化財の取り扱いについて協議を行い、申請地が周知遺跡であることと、周辺の遺跡分布の状況から、事前調査の必要があるとして1993年度に調査を実施することとした。

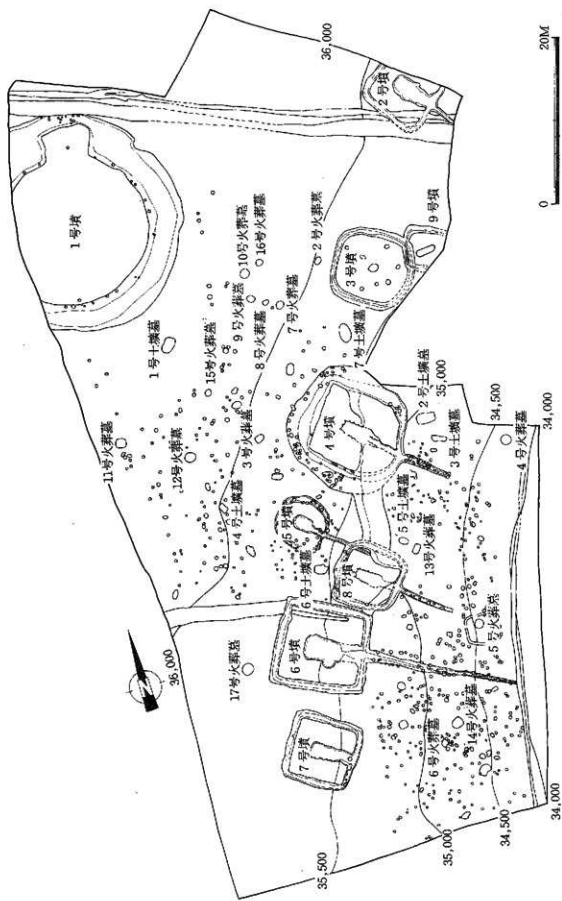


圖 2 永祚遺跡遺構配置圖 (S=1/400)

2. 調査の概要

調査は計画予定地全域にわたってトレンチによる確認調査を実施し、調査地点の絞り込みを行った。その結果、予定地西側の微高地でピットなどを確認したため、約5,000㎡についてさらに詳細な調査を実施することとした。確認された遺構は古墳8基、方形周溝墓1基、火葬墓16基、土坑墓7基におよび、7世紀～近世に至る一大墓地群であることが判明した。

3. 遺構

古墳 1号墳は周溝を含めた直径が26.5mを測る円墳で、墳丘の直径は18m、これに長3.3mの張り出しをもつ。墳丘の裾部分には径20cmのピットが規則的に配置されており、木柱の可能性はある。墳丘は完全に削平されており、主体部など詳細については知り得ない。2号～8号墳は方墳で、3号墳を除くと全て横穴式石室を主体部にもつ。3号墳は蔵骨器を伴う火葬墓を主体部にもつ。これらは全て墳丘は失われているものの、主体部の敷石及び4, 5, 8号墳については腰石が残されており、その構造を推測することは可能である。

墳丘の平面規模は最も大きい4号墳で10m×9m、最も小さい5号墳で5.3m×5mを測る。平面プランについてみると3, 4, 5, 8号墳は周溝を含めてみた場合やや隅丸の感をうけるのに対し、2, 6, 7号墳はまさに方形を呈しており、若干の企画差を認めることができる。

次に主体部の平面プランをみると、総じて縦長方形タイプであり4, 8号墳では奥壁に向かってややすぼむ傾向がある。羨道部はかなり幅が狭く、50～70cm程度で狭隘な感じをうける。

火葬墓 おおくは所謂現地火葬と考えられるもので、長辺1m程度の長方形のものと、直径1m程度の円形を呈するもの2タイプがあり、さらに各々断面が酸化焙焼成をみせるものと、そ

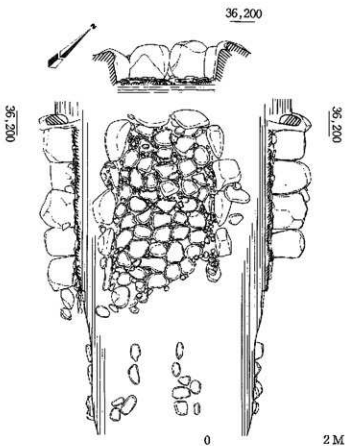


図3 4号墳主体部実測図 (S=1/60)

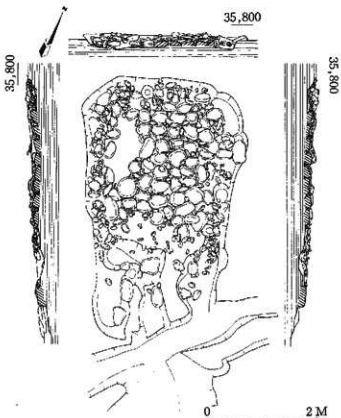


図4 6号墳主体部実測図 (S=1/60)

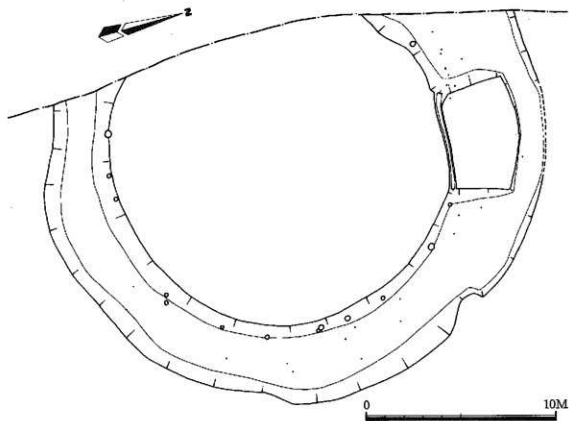


图5 1号墳实测图 (S=1/200)

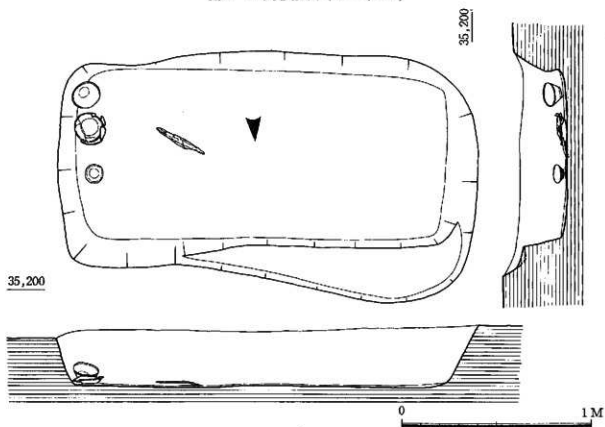


图6 2号土坑墓实测图 (S=1/20)

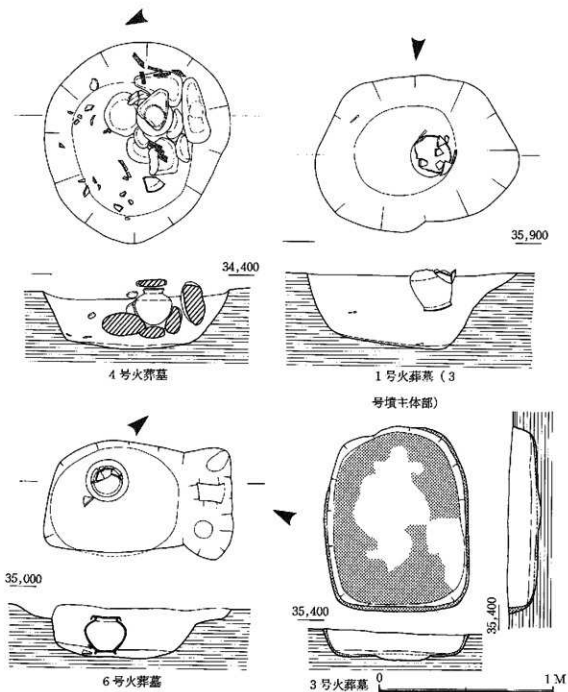


図7 火葬実測図 (S=1/20)

うでないものがある。1, 4, 6号は蔵骨器をもち、1号は3号墳の主体部である。4号は長径1.15mの楕円形の土壇で土壇底面に破砕した土器片をばらまき火葬行為を行い、これを集骨した後に、石組みを構築し蔵骨器を納め、最後に扁平な河原石で蓋をしている。6号は0.6×0.64mの方形の土壇に、皿を転用した蓋を被せて埋納を行っている。

この他近世の埋蔵(2号火葬墓)、伏せ罫タイプ(15号火葬墓)などがある。

土葬墓 7基が確認されており、時期が判明しているのは2, 4号である。2号は頸位に白磁の腕、皿、杯をもち、胸部に短刀が置かれていた。4号は1.2×0.7mの長方形を呈し、周囲に空白をもち玉砂利を敷き詰め

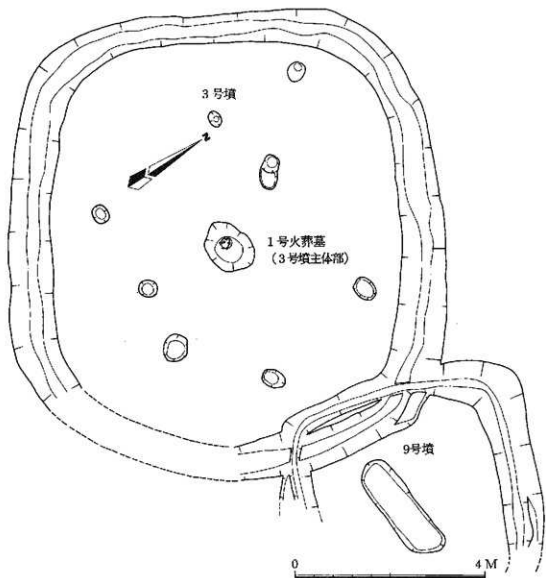


図8 3, 9号墳尖削図 (S=1/80)

方形周溝墓 9号墳で削平により全体は不明である。墳丘の規模は一边4m程度で、主軸に対して主体部である土壌を対角に配置する。遺物を伴わないため時期は不明である。

4. 遺物

総じて遺存状態が悪く遺物は限られていた。

1号墳の周溝(張り出し部)からは、樽型壺と広口壺が破碎された状況で検出された。2号墳前庭部からは平瓶、4号墳周溝では高台付き椀、6号墳の炭道部からは平瓶、周溝より蓋付き椀、さらに8号墳主体部では低脚の高杯が出土している。この他にも若干の遺物が出土している。

5. まとめ

以上述べて来た結果をもとに、若干のまとめをしたい。1号墳については、出土した遺物より少なくとも5世紀中頃の年代を与えることができる。また、墳丘裾部分で検出された柱穴が木柱列とすれば九州では初例であり、

墳丘規模は中津地方で最大のものである。方墳は出土遺物などから7世紀～9世紀前半の時期を考えることができる。主体部の構造は全て墳丘が削平されているため明確ではないが、平面形態は無袖に近いと推定され、やや先すぼみの縦長方形を呈し、敷石は縦方向を意識して整然と並べられている。石室はやや小ぶりの河原石を腰石として組んだ上で構築されるが、上部構造についてはそのまま石材を組み上げたのか、また別の構造を有したのか評価の別れるところである。これらを墳丘平面形態、及び主体部の特徴をふまえ、また炭骨器を有する火葬墓を含めてその変遷を見た場合、4号墳→8号墳→2号墳→(5号墳)→6号墳→7号墳→6号火葬墓→4号火葬墓→3号墳(1号火葬墓)の変遷が推定され、火葬墓への変換は8世紀後半と考えられる。こうした、所謂終末期古墳については豊前地域でも石室中後ヶ迫古墳群などが知られるが、永浜遺跡の如く極めて企画性の高い方墳が火葬墓への変遷を伴いながら営まれた例は無く、九州でも他に類例を知らない。

次に、一連の永浜遺跡を営んで来た被葬者について考えてみたい。律令時代の中津地方はおおまかに大家、野仲、小楠、諫山の四つの郷に別れる。このうち、大家郷は旧中津町及びその周辺地域、野仲郷は現在の大貞を中心とする地域と推定され、小楠郷については現在の市域の東部と考えられている。また、諫山郷は下毛郡三光村佐知を中心とする地域で、大家、野仲郷との境は明確でない。このうち、『續日本紀』天平一二年に、下毛の擬少領勇山伎美麻呂と言う人物の名前が見え、この人物が下毛の郡司であったと考えられている。したがって、今のところこの勇山氏以外に有力な候補は見当たらないが、遺跡の立地から見た場合、勇山氏の領地は遺跡の後背地にあたり、むしろ神代平野を見下ろす立地条件を考慮すれば、大家郷を領した一族の可能性を考えるべきであろう。それは、大家郷の経済基盤である神代平野(神代条里)の灌漑取水口(三口の大井手)との位置関係、また相原庵寺の存在などからしてもより妥当性をもつものと考えられる。

他方、この永浜遺跡を含む“通称相原の丘陵地帯”は国道10号線中津バイパスの建設に伴い1981～85年にかけて調査がなされた上の原横穴墓群、補助野地遺跡、また幡旗郡古墳群、相原庵寺の調査などにより、古代中津地方の中心地域として研究者の間で周知されて来た。こ

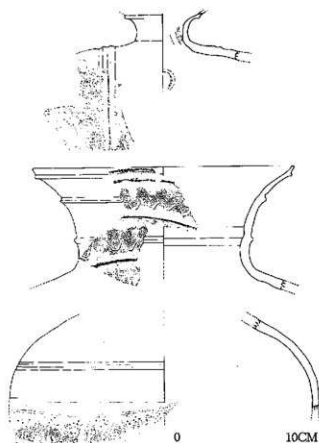


図9 1号墳周溝内出土土器実測図(S=1/3)

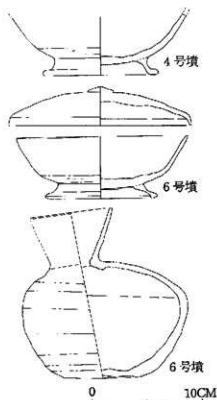


図10 4, 6号墳出土土器実測図(S=1/3)

れに今回の調査結果を踏まえて、本地区の首長墓の変遷についてみて行きたい。まず最も古く出現するのは勘助野地2号方形墳を中心としたグループで、4世紀代後半と考えられている。この後、5世紀前半に勘助野地1号方形墳のグループが続き、5世紀中頃には永添1号墳、後半には帯旗郡古墳群1、2号墳が構築される。これにオーバーラップする形で、上の原横穴墓群I期の造営が開始され、6世紀初頭にII期、6世紀後半代にIII期と営みが続けられる。上の原横穴墓群では7世紀前半まで追葬行為が続けられ、これに引き継がれるように永添2号墳～9号墳の構築が行われている。そして永添の方墳が営まれていた7世紀末に相原麻守が創建されていることは重要で、ここに4世紀代～9世紀前半に至る中津地方の支配構造の変遷を見ることが出来る。

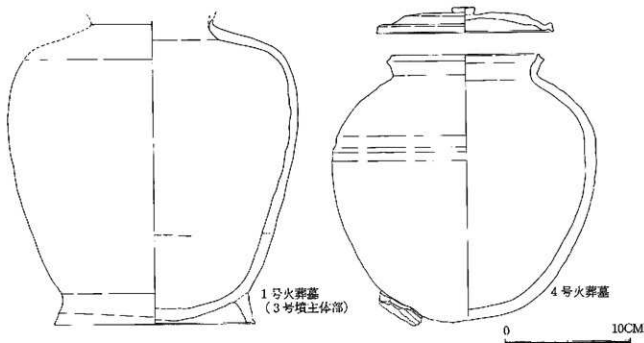


図11 1,4号炭骨器実測図 (S=1/3)

第3章 中津城跡(御用屋敷跡)

1. 調査に至る経緯

中津市では社会教育施設整備の一環として地区公民館の建設を推進しており、1995年度をめぐり南部地区公民館の新設を計画している。建設予定地は幕末の絵図によれば、大手門に近接し内堀及び御用屋敷にあたるものと考えられたため、今年度確認調査を実施することとした。

2. 調査の概要

調査は内堀推定地を中心として調査区を設定し、内堀の確認、及びその外側にある御用屋敷遺構の検出に努めた。その結果、調査区西側で内堀外側の石垣遺構を確認し、絵図では表示されていない部分にかなりの石垣が構築されていることが明らかとなった。また、御用屋敷跡では建物基礎と考えられる遺構を確認した。

3. 遺構

石垣遺構 弘化二年(1845)に書かれた『中津城堀割絵図』によれば、内堀は大手門石垣に面しておりこの部分の堀幅は八間程となっている。この記録をもとに内堀の検出を試みたところ、現在残されている大手門石垣から15.7mの位置で、延長約23mにわたって連続する石垣を検出できた。さらに石垣の状況を確認するために三か所でトレンチによる掘削を行ったところ、いずれも野面傾みによる石垣がみられ、掘底面

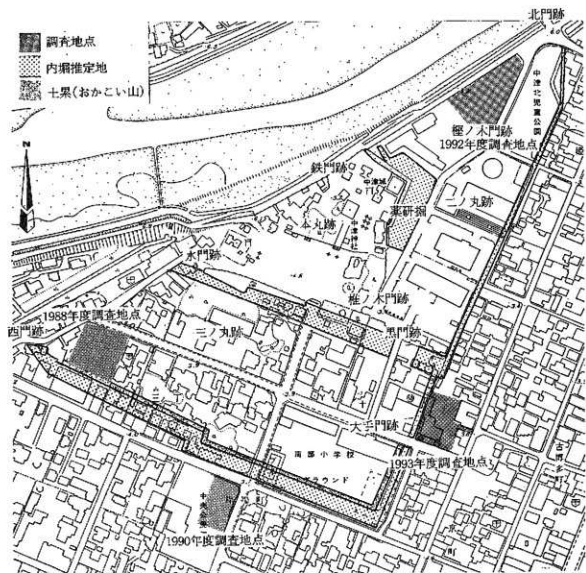


図12 中津城跡周辺地形図

の確認はできなかったものの内堀外側に石垣が構築されていることが明らかとなった。石垣に使用されている石材は全て河原石で、大手門に近くにしたがって大振りのものを使用し、逆に最も北側のトレンチを見ると、人頭大よりもさらに小さなものとなっている。これはやはり大手門付近については内側の石垣とのバランスを意識したためと考えられるが、全面に石垣を構築していない可能性も示唆している。事実、前年度調査を実施した二の丸跡の内堀では石垣は内、外側ともみられなかった。

建物基礎 内堀石垣の外側に、拳大の河原石を用いて幅50cm程の石列一か所、直径50cm程の円形に配された遺構四か所がみられた。これらはその配置から、土塁の基礎、及び何らかの建物基礎とみられ、御用屋敷に関連する可能性が高い。尚、遺物の多くは18世紀後半から19世紀代の陶磁器類で特に注目すべきものはなかった。

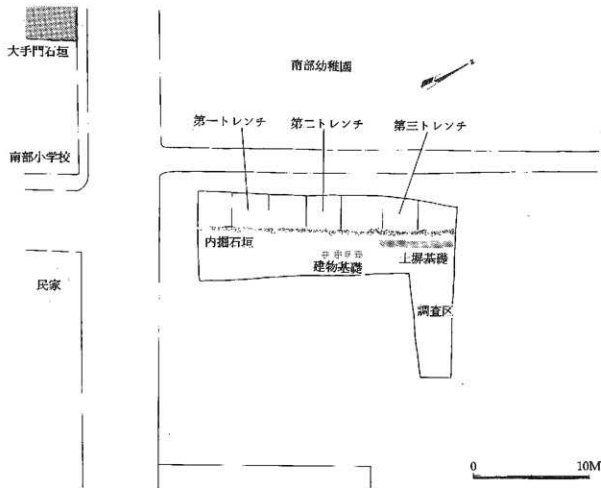


図13 中津城跡(御用屋敷跡)周辺地形図 (S=1/200)

第4章 ホヤ池窯跡

1. 調査の概要

ホヤ池窯跡は相原庵寺の供給窯として知られており、所謂瓦陶兼業窯である。窯跡はホヤ池の東岸に位置し、焚口を西側に開口している。これまでの表面採集では白済系単弁八弁軒丸瓦、鴟尾、平瓦などが得られており、軒丸瓦は相原庵寺出土の軒丸瓦と同范関係が認められている。

調査は次年度の調査の前段として、窯体と灰原範囲の確認を目的として現地踏査を行った。その結果、焚口部分は確認されたものの窯全体のプランは明確にし得なかった。しかし、灰原推定部分では瓦片や須恵器片が散乱しており、西側(ホヤ池方向)へ向けて広範囲の拡がりが見られた。

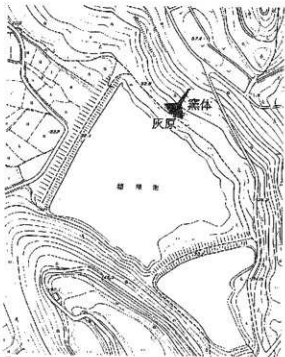
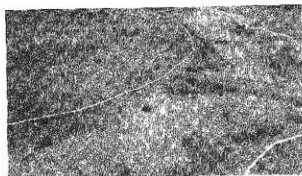


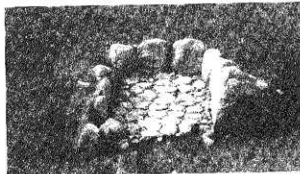
図14 ホヤ池窯跡位置図 (S=1/5000)



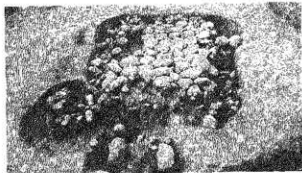
1



2



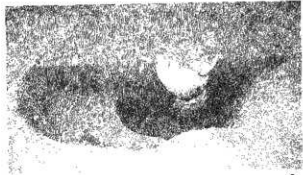
3



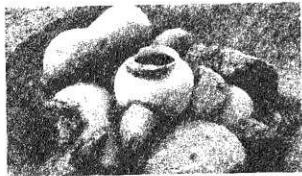
4



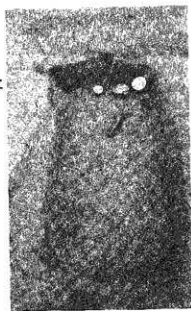
5



6



7



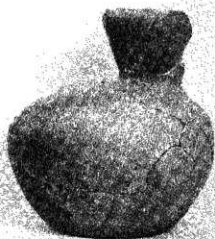
8

1. 全景(空中写真)
2. 1号墳周囲溝、木柱穴
3. 4号墳主体部
4. 6号墳主体部
5. 3号墳全景
6. 3号墳主体部
(1号火葬墓)
7. 4号火葬墓
8. 2号土牆基

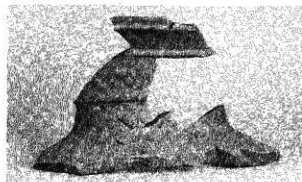
永添遺跡(1)



1



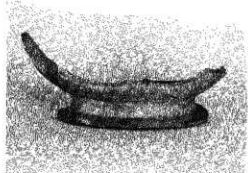
5



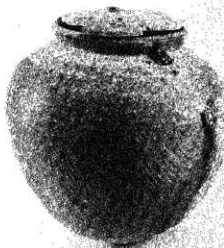
2



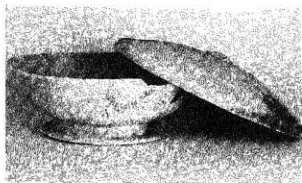
6



3



7

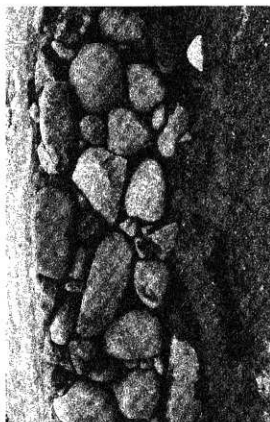


4

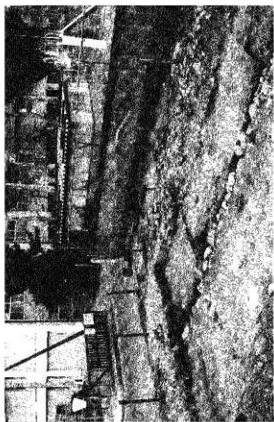
1. 1号墳出土埴型甕 2. 1号墳出土広口壺 3. 4号墳出土碗 4. 6号墳出土蓋付碗
 永添遺跡(2) 5. 6号墳出土平瓶 6. 1号火葬墓(3号墳)蔵骨器 7. 4号火葬墓蔵骨器



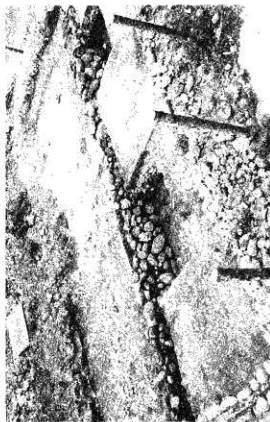
内堀外郭石垣



内堀外郭石垣(第一トレンチ)



掘削区全景(大手門方向を望む)



内堀外郭石垣全景

中津城跡(御用屋敷跡)

永 添 遺 跡
中津城跡(高川屋敷跡)
木ヤ池 竈 跡

1993年度 中津地区遺跡発掘調査報(Ⅵ)
中津市文化財調査報告 第13集

1994年 3月31日

発行 中津市教育委員会
印刷 柴川原田印刷社